

役場の対人援助論

(5)

岡崎 正明

(広島市)

受容か、克服か、それとも…

人はそれぞれ事情を抱えて生きている。一見何の問題も無い境遇に見える人も、世間的には成功者と呼ばれる人も。内容は十人十色だが、誰にだって胸にチクリとくるキズがある。「コンプレックス」「問題」「誰にも言えない秘密」。呼び名は色々だが、おそらく無キズの間人なんてまずいないだろう。

福祉の窓口に来る人の事情はとくに複雑だ。そのキズが生活の中でも大きなウエイトを占めていることが多い。まだかさぶたもできてない現在進行形のものや、古キズが膿んで腫れあがってしまったようなものもあったりする。

我が子に障害があると分かった母親。数万人に1人の難病に罹った青年。認知症の妻を介護する夫。夫に自殺された妻—。

窓口でせつせつと語られる事情。ときに怒りの声で。ときには悲嘆の表情で。「こんなことあなたに話してもしょうがない」そういうながらも、話さずにはい

られないのだろう。見ず知らずの職員に数十分以上話す人も珍しくない。

その話は誰もが経験するわけではない少

数派な内容。でも必ず何%かの割合で、そういう巡り合わせに当たる人は存在する。それが自分でないという保証はどこにもない。分かっているはずだが、人は心の根っここのところで「まさか」と思っている。いやそうではなく、結局は自分で体験しなければピンとこないのかもしれない。ドラマのストーリーとして「共感」でき泣けても、渦中に身を投じなければ本当の「実感」は得られない。当たり前だ。想いを理解しようと思ってできるだけ耳は傾けるが、簡単に「分かりますよ」などとは言えない気がしてしまう。

先日、自死遺族の講演を聞く機会があった。20代前半の息子が、ある日突然死を選んだ。高校時代は不登校などもあったが、アルバイトもして直前まで普段と変わらない様子だったという。息子の死後「どうして」「あのときこうしていれば」と答えの出ない問いや後悔ばかりが頭を巡った。数年して当事者会に参加するようになり、ようやく少しずつ気持ちの整理がつくようになった。「子どものことを思わない日はない。悲しみは消えない」と語る母親が、最後にこう言った。「時間はかかるかもしれませんが、いずれ収まるところに収まるものです」

強がりでもあきらめでもない表情と、静かだがハッキリとした口調が印象的だった。

人が受け入れがたい現実と直面するとき「受容」とか「克服」といった言葉がよく使われる。テレビは「病気を克服して」「困難を乗り越えて」という。我々援助者も「この人は受容ができていない」「できている」などと当たり前のように使う。的外れな言葉ではないが、どうも第三者視点のネーミングという感じがして、あまり簡単には多用したくない思いがあった。当事者のはしくれとして、以前からもっといい塩梅の言葉はないものかと思っていた。

「収まるところに収まる」というのは、克服でもなければ、ただ受容するのとも少し違う気がする。自分という「部屋」に送られてきた、大きな荷物（＝受け入れがたい現実）。それが少しずつ整理され、収められていく過程だ。

ある日突然届いた巨大な荷物。無遠慮に部屋の中央に居座る。それまでの居心地のいい空間が台無しになる。荷物は常に視界に入る。歩けばぶつかる。苛立ちと絶望の波が繰り返してやってくる。荷物があるだけで、部屋はこれまでとまったく違う景色に見える。でも捨てることは許されない。なんとか片付けたい、荷物をどかしたいが、こんな大きなものを収める場所がない。引き出しを開いてみるが、とても入りきらない。途方に暮れる。振り返ると変わらずあの荷物が部屋を占拠している。これが現実のすべてだといわんばかりに。

だが時間の力や誰かの支えを糧に、人は少しずつ収めどころをみつけていく。ゆっくりと、だが着実に。ふとしたことで新たな引き出しがあることに気付く。死角になって今は見えないが、きれいな絵を飾っていたと思い出す。焦って無理なところに収めようとしたり、何度も場所を変えてみたりしながら、少しずつ落ち着き先を決めていく。まさしく気持ちの「整理」である。整理だから荷物は消えてなくなるわけではない。引き出しを開ければ、またそこに変

わらずある。たまにうっかり取り出してしまつて、部屋が散らかってしまうことも。ただ1度収めどころが分かれば、次からはより早くしまえるようになる。荷物の存在に、以前ほど心が波立たなくなる。

荷物のある生活になじんでいく感じか。「収まるところに収まる」。当事者視点の言葉として、とても腑に落ちた。同時に何か似ているなあとも。それはソリューションフォーカストアプローチ（解決志向）の考え方。問題の消失を目的とするのではなく、解決を志向すること。それはつまり、当事者が問題を問題と感じなくなったり、問題がある生活に適應できたりすれば、それも解決である、ということだ。「収まるところに収まる理論」。いい線いっている気がしてきた。

もちろん言葉など完璧ではない。「克服」の方がいい、ピッタリくるという人もある。それも間違いではない。正解は1つではないのだ。大切なのは普段援助者として何気なく使っている言葉が、誰の視点に立って表現されているかをわきまえること。そして相手の立場や個別性を想像する努力を、常に怠らないことではないか。

おまけにもうひとつ。映画『フォレストガンプ』の話。ベトナム戦争から帰還した主人公フォレストと上官のダン中尉。負傷により両足を切断し、車イス生活になったダン中尉は運命を呪い、自暴自棄になる。酒や女に走り、誰かれなく怒りをぶつける。フォレストの仕事を手伝うも、死も厭わない無茶な行動に出る。しかしある時ふとしたきっかけで彼の心に平穏が訪れる。すべてを受け入れ、穏やかに微笑むようになる。まるでその時が来るべくして来たかのよう

に。それを見てフォレストが語る。「中尉は、神様と仲直りしたんだ」と。「神様と仲直り」かあ。なるほどこれも言いえて妙。好きな表現である。